

第1回 J-GBF 行動変容ワーキンググループ 議事要旨

1. 日時：令和4年1月6日（木）17:00～18:30

2. 場所：オンライン開催

3. 出席者

（座長）東北学院大学経済学部 准教授 佐々木 周作

（専門委員）国立環境研究所 生物多様性領域 主任研究員 久保 雄広

（専門委員）株式会社バイオーム 代表取締役 藤木 庄五郎

（J-GBF 委員・関係者：約70名）

日経 ESG シニアエディター・東北大学大学院 生命科学研究科 教授 藤田 香
経団連自然保護協議会

全国農業協同組合中央会（JA 全中）

国際自然保護連合日本委員会（IUCN-J）

公益社団法人 日本動物園水族館協会

公益財団法人 日本博物館協会

国連生物多様性の10年市民ネットワーク

SATOYAMA イニシアティブ推進ネットワーク

生物多様性わかものネットワーク

公益財団法人 日本自然保護協会（NACS-J）

地球環境パートナーシッププラザ（GEOC）

公益社団法人 国土緑化推進機構

一般社団法人 Change Our Next Decade (COND)

Japan Youth Platform for Sustainability

生物多様性自治体ネットワーク

農林水産省

（オブザーバー：3名）

日本生活協同組合連合会

消費者庁

4. 開会

開会挨拶 環境省 奥田 直久自然環境局長

・ポスト2020生物多様性枠組、GBFの採択を目指して国際交渉が行われている。我が国では、この国際枠組みの採択に先駆け、UNDB-J（国連生物多様性の10年日本委員会）の後継組織となる、「2030生物多様性国際枠



組実現日本会議（J-GBF）」を昨年11月に立ち上げた。

- ・次期生物多様性国家戦略の策定においても、ライフスタイルへの反映、一人一人の行動変容についても重要な観点として議論をしていく予定。
- ・本ワーキンググループは、様々なステークホルダーの行動変容に向けての第一歩となる。産官学民、様々な皆さまと共に議論しながら取り組んで行くことにより、GBF、新たな枠組みそのものに寄与していきたいと考えている。

5. 議事

- (1) 行動変容 WG の設立について
- (2) 取り組みの現状と今後の進め方について
- (3) 情報提供
 - ・政策ナッジの使い方（佐々木委員）
 - ・生物多様性保全に向けた行動変容（久保専門委員）

6. 議事概要

- (1) 行動変容 WG の設立について

事務局から、以下の内容について説明した。

- ・資料 1-1 行動変容 WG 設置要綱（案）
- ・資料 1-2 行動変容 WG の概要について

○質疑応答

- ・質疑なし

事務局より、設置要綱（案）の承認についてお諮りした。

- ・異議なし
- ・設置要綱（案）の（案）を取り、本日より施行

事務局より、設置要綱に基づき座長の選出をお諮りした。

- ・IUCN-J 道家氏より、佐々木委員の推薦あり
- ・異議なし
- ・佐々木委員に座長をご依頼

○佐々木座長 ご挨拶

- ・私自身このようなワーキンググループの座長という大役を務めさせていただくことは初めてだが、大変挑戦的な内容のワーキングだと思うので、皆さまと力を



合わせてやっていきたい。



(2) 生物多様性の主流化・行動変容に関する取り組みの現状と今後の進め方について事務局から、以下の内容について説明した。

- ・資料2 生物多様性の主流化・行動変容に関する取り組みの現状と今後の進め方について

○質疑応答・意見交換

(国連生物多様性の10年市民ネットワーク：宮本氏)

- ・MY 行動宣言は策定の際に取り組んでもらいやすくするためにチェック欄が採用された経緯がある。今回の自由記入への改訂において、書いてもらえないという懸念については検討されたか。
- ・宣言後に実際どのような行動変容をしたのかを把握することが大事だと考えるが、フォローアップの調査もするのか？

(事務局)

- ・今回は記入した場合の効果を計る調査業務として実施する。その結果を確認した上で、チェック式にした方が良いかも含め検討していく。
- ・フォローアップはアンケートに回答してもらい、行動変化の程度をチェック式と比べる。

(藤木専門委員)

- ・目指している数値目標などが現状あるのか、あるいは目標値をこれから検討するのか？



(事務局)

- ・現状、具体的数値目標はない。このワーキンググループで議論していくひとつのテーマ。
- ・今後、GBF で目標値ができるのであれば、それを参照。また新国家戦略でも何らかの目標値を設定することになっているので、そちらも合わせて検討していきたい。

(国連生物多様性の10年市民ネットワーク：坂田氏)

- ・生物多様性の認知度について、若年層は高いが、自然への関心度はとても低い。認知度について、もう少し幅広く捉えていく必要がある。現状データも提示してもらい作戦を考えた方がよい。

(事務局)

- ・重要な観点だと思う。認知度、言葉を知っている人を単純に増やすのが目的ではない。生物多様性に寄与する行動に変容させていくことが、このワーキンググループの重要な目的となる。そこを議論していきたい。参考となるデータは確認しておく。

(長野県：須賀氏)

- ・関心度、意識レベルによって、情報の受け取り方、反応が違う。意識のレベルによって、行動変容につながるメッセージが変わってくると思う。アンケートの中で、メッセージの受け取り方の違いも調査されるのか。

(佐々木座長)

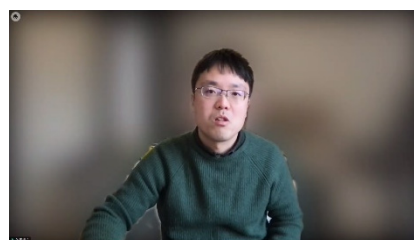
- ・最適な介入が人によって違うということと、チャネルによっても違うのではというご指摘だと思う。今後の展望も含めて回答をお願いします。

(事務局)

- ・基本的な属性についてアンケートで確認する。ご指摘を踏まえ、属性別の傾向がどうなっているかは確認できると思う。また来年度フォローアップの調査をする場合、ご指摘・観点を踏まえて、調査、検討を実施していきたい。

(久保専門委員)

- ・行動変容といっているからには、その後の行動を把握できるかが大事になってくる。MY 行動宣言、生物多様性の認知の後に、実際の行動、何につながっているか。環境省や実務の方が宣言の後に何を求めるのか、行動の部分をもう少し整理してから、宣言、メッセージを考えていった方がいいと思う。



(佐々木座長)

- ・フォローアップの行動把握をどう計画されているか、今後変更を加えていくことができるのかについて回答をお願いします。

(事務局)

- ・今年度の調査については、それぞれの行動がどの程度変わったかをアンケート調査する。今のご指摘がフォローできているかは改めて把握する。ご指摘も含めて整理検討した上で、第2回のワーキングで提示する。

(事務局)

- ・ご指摘のご主旨は、行動の中身、望む行動をしっかりと定めるということか。宣言をした後の行動把握の対応をしっかりとするというご指摘か。

(久保専門委員)

- ・どちらも考えなければならない。1つにはMY 行動宣言等で聞く内容が重要になる。聞いた内容/行動が本当に生物多様性保全につながっているか。もう1つは、回答と実際の行動ではギャップがあるが、本当の行動を測るために、実際の行動をどうやって測るか、そこにどれだけ相関があるか、意識と行動のつなぎ合わせを考えて設計した方がよい。

(事務局)

- ・このワーキンググループで皆さんからご意見をいただきたい。行動把握については、宣言してくれた方の SNS を追跡して実際の行動を追うなど、どこまで信憑性があるかはわからないが、新しい技術を使って追跡していくなど、皆さまから、お知恵をいただきたい。

(佐々木座長)

- ・効果測定で行動をどう把握するかということだと思う。後ほどの久保さんのご発表の中でもご説明あると思う。

(日本自然保護協会：武田氏)

- ・コロナをはじめとして、疫病の蔓延と生物多様性の関係、ワンヘルスなどに関心が高まってきている。アンケートなどでも、健康や疫病とつなげると良いと思う。既に、計画、検討されていることがあるか。

(事務局)

- ・重要な観点だが、これまであまりワンヘルスアプローチについての議論はできていなかった。今後、次期国家戦略でもワンヘルスの観点も踏まえて議論がなされていくこととなる。それを踏まえて、このワーキング、J-GBF での取扱いを考えていく。

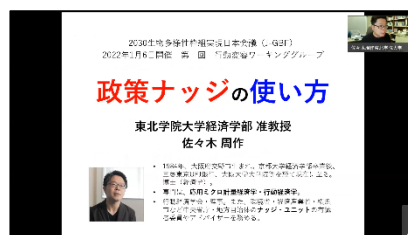
(佐々木座長)

- 色々な分野にまたがったテーマなので、全体像を掴みにくいところはあると思うが、徐々に把握して議論をしていきたい。

(3) 情報提供

佐々木座長、久保専門委員より、以下の情報提供をいただいた。

- 佐々木座長 ご発表
「政策ナッジの使い方」



- 久保専門委員 ご発表
「生物多様性保全に向けた行動変容」



(佐々木座長)

- 私と久保委員とのアプローチは似ていて、社会の中で実験を行ってデータを取って、そのエビデンスに基づき社会や政策に対して提言をしていくというもの。そうすると実験しやすいことでエビデンスが積み上げられている。これまで生物多様性の分野においては、全体的にエビデンスが蓄積されにくかったのではないかと思う。自己申告の行動や意向を把握するアンケート調査にも限界がある。一方でテクノロジーの発達で、そのギャップが埋まり始めている。
- このワーキンググループに参加していただいている実務、フィールドをお持ちの方とつながって連携しながら、有用なエビデンスを作り、提言できることを期待している。

○質疑応答・意見交換

(国連生物多様性の10年市民ネットワーク：坂田氏)

- 背中をそっと押してくれる、オピニオンリーダー、翻訳者の役割は重要だと思っている。ナッジとそれを促していく主体について、オピニオンリーダー的なものがあるのかを教えてください。

(佐々木座長)

- これまでのナッジの研究は人を介したのものより、既存のマスのコミュニケーション、DM やインターネットの広告を通じて検証されてきたものが多い。それは、人を介さない方が良いということではなく、既存の行政のコミュニケーションをどう改善していくかという観点で実施されていたものだから。
- 一方で既に人的ネットワーク、教育する制度が整っている分野であれば、人を介してナッジ的なコミュニケーションをとることで効果がより大きくなることが期待できる。人に対して知見を共有することができれば、それは有用であると思う。

(IUCN-J 道家氏)

- 佐々木座長より、現場を持っている団体とつながって取り組んでいきたいというご発言があった。具体的にどういう風に進めるといいのか？

(佐々木座長)

- この会議の場以外でも、色々連携しながら個別の取組が進んでいくとよいと思う。私たちが参加して実施することと、皆さん独自に進めていただくことがあると思うが、どんどん進むとよいと思う。
- 来年度は、その中で芽が出たものをこの場で報告していただき、検討・展開していけるとよい。やり方については事務局に連絡していただき、相談して欲しい。

(事務局)

- ワーキンググループで議論するだけでは行動変容が進まない。いくつかフィールドを設けて、ワーキンググループ外で実施できるといい。本日、市民団体、自治体の皆さん、多数の方にご参加していただいている。今後相談していきたい。

(藤木専門委員)

- ナッジは活用できる場所、その選択にたどりついた場面で役立つもの。広く国民に行動変容を促すアプローチの部分はどうやるか。キャッチーなチラシがあってもそれを見てももらえないと効果がでない。今後の課題として議論に入れていかなければならない。

(佐々木座長)

- 同じ意見。MY 行動宣言の改定についても、どの場面で、誰にどうやって見せるか。その直後にどういう行動があるのかという、戦略が必要。各フィールドを持っている人たちに、どこで実施するのがいいかなどのお知恵や実践例をいただきたい。

以上